

スーダン共和国におけるヌビア遺跡群の現状と 文化財保護における課題

関廣 尚世

Current Conditions of the Nubian Sites and Maintenance Issues of Cultural Heritage in Sudan

Naoyo SEKIHIRO

本稿では、スーダンでヌビア遺跡群救済キャンペーンの対象となった建造物（以下ヌビア遺跡群と呼ぶ）の現状について述べ、また原位置から移築したヌビア遺跡群に言及しながら文化財に関わる問題に着目するものである。エジプト南部からスーダン北部に位置するヌビア遺跡群は、アスワンハイダム建設に際し移築され、それがユネスコ主導のもと世界遺産条約制定の端緒となったことはよく知られている。エジプト側のヌビア遺跡群は遺跡の原位置から近い場所に移築され、世界遺産に登録されているのに対し、スーダン側のヌビア遺跡群は原位置から遠く離れた首都ハルツームに移築され世界遺産には登録されていない。エジプトのヌビア遺跡群と異なり、ハルツームに移築したヌビア遺跡群には外国人観光客はあまり訪れないが、学校教育の題材として活用されている。ハルツーム博物館にあるヌビア遺跡群は、今後のスーダンにおける文化財の活用に対しても非常に示唆に富んだ存在といえる。

キーワード：ヌビア遺跡群、スーダン、世界文化遺産、保存、活用

This paper reports on the current conditions of the structures that were covered by Campaign to Save the Monuments of Nubia: hereinafter Nubian Sites in Sudan and discusses some issues related to cultural heritage management with special reference to Sites that were physically transferred from their original locations. It is well known that Nubian sites, that are spatially distributed from southern Egypt to northern Sudan had to be re-located prior to the construction of the Aswan High Dam, that eventually led UNESCO to draft the international treaty for the preservation of the World Cultural Heritages. While the Nubian sites in Egypt were re-located within the same vicinity and have been designated as the World Cultural Heritages, those in Sudan were moved far away from the original locations to the capital, Khartoum, and have not been designated as World Cultural Heritages. Although the re-located Nubian sites in Khartoum do not attract as many foreign tourists as those in Egypt, I have observed that they are well utilized as resources for local education. It is also important to note that the maintenance of Nubian sites in Khartoum should serve as a precedent that significantly contributes to future cultural heritage management in Sudan.

Key-words: Nubian sites, Sudan, the World Cultural Heritage, maintenance, management

1. はじめに

世界遺産登録の声が国内外から聞こえて久しい。しかし、地域の復興をかけて世界遺産登録を目指し思いがちなぬ地もあれば、登録されたことで来跡者が増え、遺産や周辺環境がかえって荒らされるところもある。はたして、世界遺産に登録されれば遺跡は本当に守られるのか？

このような疑問から、世界遺産とはどのように成立し、本来どのように活用されるべきなのかをもう一度振り返る必要があると考えた。世界遺産という概念は近年拡大しており、登録の候補となる遺産にも少しずつ変化がみられる

(高橋 2009: 148-151; 松浦 2008: 139-174)。しかし、この変化の中で基本を見失ってはいないか。このために着目すべきはヌビア遺跡群である。

ユネスコが 20 カ国のメンバー国で実際に発足して 4 年後、1950 年にユネスコ本部事務局に人類の文化遺産部が新設され、翌 1951 年には「記念物・芸術的歴史遺跡考古学的発掘に関する国際委員会」が設立された。破壊された遺跡の修復保存、とくに技術的・経済的に困難を伴う途上国のニーズに応えてのことである。しかし、当時は保存技術や行政上の制度に関する情報収集と情報提供が主であ

り、一過性の助言にとどまり大きな役割を果たすことができずにいた。そこから一歩前進し、より総合的な援助方法を示したのがヌビア遺跡群の保存問題であった(河野 1995: 415-417; 松浦 2008: 70-74)。ヌビア遺跡群の保存問題にいたる以上の経緯から、同遺跡群は世界遺産条約制定のきっかけとなった遺跡といえることができるだろう。

本稿は、このヌビア遺跡群のなかでもスーダン共和国(以下、スーダン)側のヌビア遺跡群の現状とそれが抱える課題に着目した調査の概要である。また、第14回日本西アジア考古学会での口頭発表で報告した内容である。

調査は、カメイ財団による平成20年度、学芸員等博物館職員の内外研修に対する助成によるものである。調査期間は2009年1月18日～25日で、調査場所は首都ハルツームにあるハルツーム博物館である。調査内容は、ヌビア遺跡群移築建物の現状に関する調査とその活用の現状に関する調査、室内展示室におけるヌビア遺跡群出土遺物の現状把握と課題抽出である。また、スーダンが抱える文化財保護の問題点についてもスーダン人専門家との意見交換をおこなった。

2. 調査の経緯と目的

ヌビア遺跡群とは、エジプト・アラブ共和国(以下、エジプト)のアスワンからスーダンのナイル川第2急湍までに分布する遺跡群を指す(図1)。人口増加に伴う耕作地の不足や電力不足を解消するため、1951年にエジプト大統領ナセルはアスワンハイダム建設を決定した。一方で、水没の危機に瀕した多くの歴史的遺産の記録・保存を両立しようとした。このダム建設に伴う調査から移築復元までの活動をヌビア遺跡群救済キャンペーンと呼ぶ。第2次中東戦争や東西冷戦などの難しい政治的背景をよそにブラジルの資金拠出をかわきりとして60カ国以上もの国々がこのヌビア遺跡救済キャンペーンに参加した。そして、人類共通の遺産を国を超えて守ろうという姿勢は、世界遺産概念の形成に寄与し世界遺産条約制定の端緒となった。

現在、世界遺産のひとつとして、アブ・シンベル神殿(Temple of Abu Simbel)やフィラエ神殿(Temple of Philae)がよく紹介されるが、エジプト側にはほかに多くの建造物が3つの保存地区にある(関廣 2008: 12-14, 2009: 73)。

カラブシャ保存地区は、ニューカラブシャ(New Kalabsha)と呼ばれておりケルタッシのキオスク(Kiosk of Qertassi)、 Beit al-Wali神殿(Temple of Beit al-Wali)、カラブシャ神殿(Temple of Kalabsya)、ガルフ・フセイン神殿(Temple of Gerf Hussein)、岩絵(岩壁画)¹⁾の断片が移築されている。他の保存地区も同様であるが、遺跡の原位置から近い場所に保存地区が設置され

ている。保存地区内では、カラブシャ神殿の北西方向に Beit al-Wali神殿といたる具合に原位置での位置関係を反映させた形で移築復元されている。

セブア保存地区は、ニューセブア(New Sebu'a)と呼ばれている地域で、ダッカ神殿(Temple of Dakka)、マハラッカ神殿(Temple of Maharraqa)、セブア神殿(Temple of Sebu'a)²⁾が移築されている。保存地区内では、セブア神殿からダッカ神殿の間に未舗装の遊歩道が造られている。

アマダ保存地区、はニューアマダ(New Amada)と呼ばれている地域で、アマダ神殿(Temple of Amada)、デール神殿(Temple of Derr)、ペンヌウト墓(Tomb of Pennut)³⁾が移築されている。とくにアマダ神殿は移築された建造物群で約2.6kmと移築距離がもっとも短い神殿である。それは、解体による壁画の損傷を防ぐためフランス隊の援助により神殿を丸ごとジャッキアップし、レールに乗せて移動させたためである。

最後に唯一原位置に残されている遺跡がある。カスル・イブリーム(Qasr Ibrim)である⁴⁾。しかし、一般には船上見学のみが許された遺跡で上陸することはできない。この遺跡群は主に、アスワンまたはアブ・シンベルから客船にのり、3泊4日または4泊5日で見学するのが一般的で、

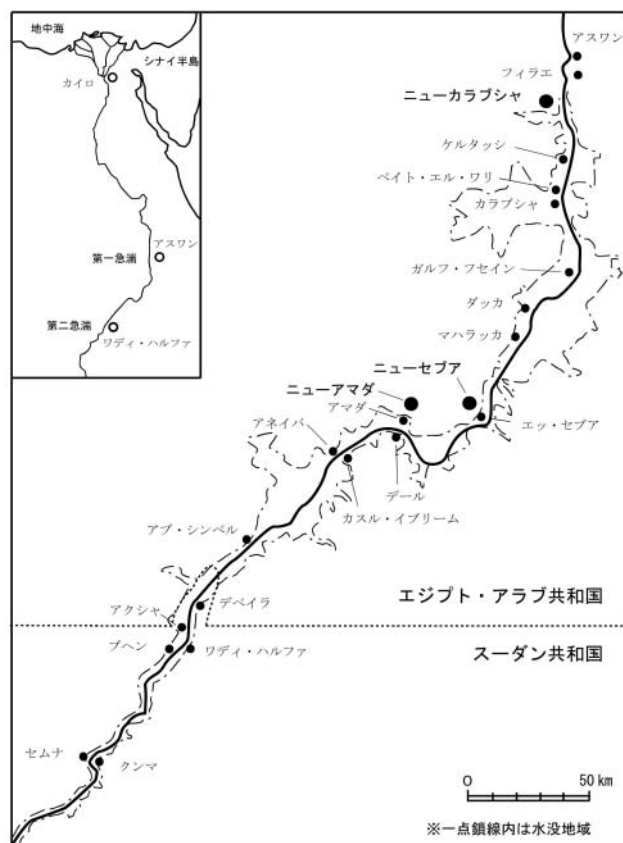


図1 ヌビア遺跡群分布図

それゆえアクセスが限られている。したがって訪問者も観光客と遺跡管理や遺跡ガイドに従事する人間に限られている。地元民よりも外国人観光客が圧倒的に多いが、交通手段が非常に限定されていることからフィラエやアブ・シンベルと比較すると訪問者数は極めて少ない。

エジプト側のヌビア遺跡群は、そのほとんどが観光地化されていることもあり、日本からも多くの情報を手に入れることが可能である。3つの保存地区に限っても筆者のみならず、比較的、多くの日本人が訪れている場所でもある。次にスーダン側のヌビア遺跡群について考えようとした時、ユネスコの支援によりハルツーム博物館が建設されたことや「その庭園にはナイル川を象徴する池がほられ、そのまわりに水没地域から移された建造物のいくつかが野外博物館に配置された」（河野 1995: 449）とあるばかりで実状に関する情報が乏しい現状に直面した。

それは、スーダンがエジプトと異なり観光国ではないこと、ハルツーム博物館に移築されたヌビア遺跡群は世界遺産未登録であること、近年の政治的な状況によりスーダンの文化財自体に関心がもたれにくいことなどが原因であるが、エジプトのヌビア遺跡群との比較を行うには、現地で各建造物群の移築状況を確認し、どのように活用されているかということとをありのままに観察する必要がある。また、移築されたヌビア遺跡群をスーダンの文化財関係者がどのようにとらえているのか、スーダンの文化財保護の現状についてもその活用の背景として調査する必要がある。

以上の経緯と目的によりハルツーム博物館での調査を行った。詳細は次のとおりである。

3. ハルツーム博物館での展示について

(1) 屋外展示

ヌビア遺跡群のハルツーム移築が決定したとき、すでにハルツーム博物館が完成しており、建造物群の移築場所が課題となった。この作業にはドイツ人建築家F. ヒンケル(Hinkel)が大きく貢献したが⁶⁾、同氏は博物館前庭にナイル川を設定し、その両岸に移築建造物群を配置するという方針を打ち立てた。現在、ハルツーム博物館の入館ゲートをくぐると、ナイル川を意味する水路が目に入る(図2)。水は張られていないが壁面は水色に塗られ、それが川であることが一目瞭然である。そしてこの擬似ナイル川にそって、ヌビア遺跡救済キャンペーン時に解体された建造物が移築されている。

その建造物とは、アクシャ神殿(Temple of Aksha)、ジェイホテプ墓(Tomb of Djehutihotep)、ブヘン神殿(Temple of Buhen)、セムナ神殿(Temple of Semna)、クンマ神殿(Temple of Kumma)で、1962年から1967

年にかけて移築された。また、ブヘン神殿とセムナ神殿の間には様々な遺跡で出土した大型の建築部材も移され、展示されている(図2-⑥)。残念ながら各部材には説明文がなく、何遺跡の何遺構出土なのかを知ることは容易でない。このなかでも出土地がわかるものに、ゲベル・シェイク・スレイマンで(Gebel Shaikh Suleiman)出土し、第1王朝初期に位置付けられているレリーフがある⁵⁾。

各建造物はハルツーム周辺の湿潤な気候を考慮した地下構造をもつ。床板と基礎の間に鉛箔を挟み、地下からの湿気を建造物が吸い上げないために工夫がなされているが、この構造を直接観察できるところはない。

次に各建造物の概要と現状について述べてみたい。

① アクシャ神殿(図2-①)

【概要】アクシャ神殿はナイル川西岸に位置し、ラムセス2世が神格化した自分自身に捧げた神殿である。また、塔門、前庭、前室、至聖所からなる独立型の神殿である(Porter and Moss 1995: 120, 127)。ブヘン神殿と同時並行でフランスの資金提供により1962～63年に移築作業が行われた。(Säve-Söderbergh 1987: 145)。地下水が引き起こす塩害の影響で解体作業は困難を極めた。

【現状】前室南壁南面のみを観察できるように吹き放しの覆屋の下に移築復元されている。非常に断片的な復元である。

② ジェイホテプ墓(図2-②)

【概要】ジェイホテプ墓はナイル川東岸に位置するデベイラに造られた岩窟墓である。ジェイホテプ自身はハトシェプスト女王期のデベイラ首長でエジプト化したヌビア人であったとされている(Säve-Söderbergh 1960: 145)。アクシャ遺跡やブヘン遺跡と同時並行で、1963年に移築作業を行った(Säve-Söderbergh 1987: 147)。

【現状】現在のオムドルマンの北に位置するマルキアット山から搬入したスレートを積み重ねて岩窟を作り、石室主軸がほぼ東西を向くよう復元されている。

岩窟墓南側にガイダンス室が設けられ、英語とアラビア語による遺跡原位置に関する説明があり、移築作業の写真が展示してある。前室は、復元東西長約6.2 m、復元南北長約4.5 mの規模をもつ。このうち彩色壁面が残存するのは前室入り口のある西壁面北側から北壁面西側と西壁面南側、および北壁面東側の3箇所である。通常、入口は閉めてあり照明も切っており、彩色の退色や剥落が激しい状況にある。

③ ブヘン神殿(図2-③)

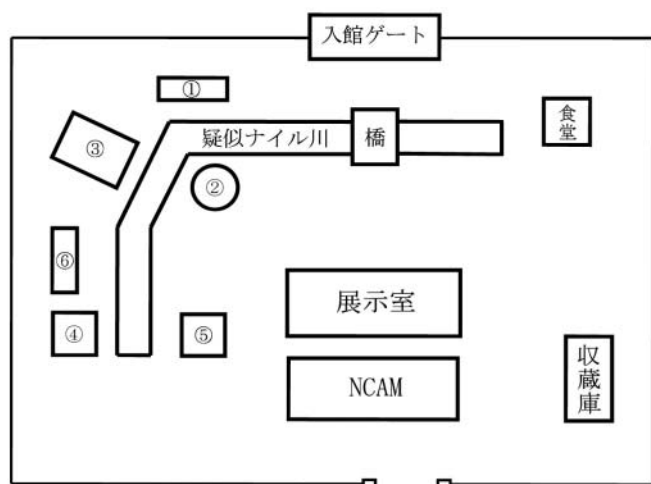
【概要】ブヘン遺跡はナイル川西岸に位置し、中王国時代には東西約150 m、南北約170 mの城塞都市が造られた。この城塞にはアメンホテプ2世がイシス神とミン神に捧げた神殿と、ハトシェプストとトトメス3世がブヘンのホル



①アクシャ神殿覆屋



②ジェイホテブ墓外観



ハルツーム博物館 屋外展示模式図



③プヘン神殿覆屋



④セムナ神殿覆屋



⑤クンマ遺跡覆屋

註 屋外展示模式図にある⑥は、スレイマンをはじめとする遺跡から出土した大型部材や、レリーフを寄せ集めた展示施設である。①アクシャ神殿覆屋と同じ吹き放しの構造を持つ。

図2 屋外展示の現状

ス神に捧げた神殿が存在した (Caminos 1974: 11-13, 105-107)。ブヘン神殿はこのホルス神殿のほうで、塔門、前庭、前室、至聖所、3つの副室からなる。イギリスとアメリカの資金援助で1963～67年に移築作業を行った (Säve-Söderbergh 1987: 145)。移築には、砂岩を補強するためのシェラック⁷⁾が用いられた。また、当時のスーダンには、神殿解体に利用可能なクレーンがなかったため、神殿を一度砂で覆い、上部のブロックから少しずつ外していくという古代から用いられていた方法を採用した。外した石材は修羅にのせて運搬し、滑道には安価に手に入るマホガニー材を用いた。また、運搬時にブロックを包む6mにもおよぶ巨大な布は、現地の女性たちが織り上げたものであった。**【現状】** 移築されたのは前庭の一部と前室および至聖所である。復元時に原位置が不明な石材については神殿の復元された西壁に埋め込んで展示してある。また、床はジェイホテプ墓の墳丘に用いられているのとおなじマルキアット山で産出したスレートが用いられている。

移築神殿はヴォールト型の屋根を持つ可動型の覆屋に覆われており、天井には採光窓が設けられている。この覆屋は3つに分かれており、レール上に乗っている。このため入り口側から神殿奥に向かって入れ子状に収納することが出来る構造となっているが、20年間はこの覆屋を移動させたことはない。神殿の奥にこの覆屋を移動させ、神殿全体を露出させた状態はR. A. カミノス (Caminos) による報告図版で確認することができる (Caminos 1974: Pl. 7, 8)。ブヘン神殿の場合は入り口に説明パネルがかかげてあり、保存状況が良好な壁画との比較が可能である。

④ セムナ神殿 (図2-④)

【概要】 セムナ遺跡はナイル川西岸に位置し、中王国時代に南北約120m、東西約95mの要塞が築かれ、要塞内にはデドウェン神殿やトトメス1世神殿などが造られた。セムナ神殿とはデドウェン神殿のことである。遺跡内には他に中王国と新王国の墓群、岩壁碑文等も存在したが、それらは水没した。

セムナ神殿はヌビアの神デドウェンと神格化したセンウセルト3世に捧げられたもので、トトメス3世が主に造営にかかわっている (Caminos 1998a: 12-15)。移築復元は1963～67年にベルギーの資金援助で行った (Säve-Söderbergh 1987: 145)。移築方法はブヘン神殿と同じで、総ブロック数は146点にものぼった。

【現状】 神殿は東西柱廊と至聖所が移築復元の対象となっており、復元に組み込むことが出来なかった石材が西柱廊の西側に展示してある。床にはブヘン神殿と同じくスレートが敷いてある。ブヘン神殿と異なる点は、屋根を一部復元し、その上に鳥よけネットを張っていることである。また、ブヘン神殿の覆屋が三重構造であるのに対し、セムナ

神殿のものは一重構造で西側に移動できるようレールが設置されている。

⑤ クンマ神殿 (図2-⑤)

【概要】 クンマ遺跡はセムナ遺跡の対岸、ナイル川東岸に位置し、中王国時代にセンウセルト3世によって築かれた要塞遺跡である。クンマ神殿とは新王国時代にこの要塞の中に造られたクヌム神殿のことである。トトメス2世が創建し、トトメス3世の治世にも造営は続けられ、アメンホテプ2世がこれを大きく改修したとされている (Caminos 1998b: 1-4)。移築復元は1963～67年にオランダの資金援助で行った (Säve-Söderbergh 1987: 145)。移築方法はブヘン神殿やセムナ神殿と同じで、総ブロック数は480点にものぼった。

【現状】 クンマ神殿は、原位置と同じようにセムナ神殿覆屋の擬似ナイル川をはさんで対岸に移築復元され、一重の可動式覆屋がかかっている。床にはブヘン神殿と同じくスレートが敷いてある。第2前庭部から神殿北西隅に位置する2つの至聖所までが移築復元の対象となっており、至聖所の根材を一部復元している。天井には鳥よけのネットが張られており、これはセムナ神殿も同様である。覆屋は、ブヘン神殿やセムナ神殿同様に20年近く動かしたことはない。

(2) 屋内展示

① 現状

屋内展示建物は、1階が先史時代からポストメロエ期までの展示で、入り口を入るとタハルカ王の立像が目に入る (図3)。入口左手が先史時代の展示ケースで、順を追ってAグループ、Cグループ、ケルマ期、エジプト支配期、メロエ期、ポストメロエ期である。これらの展示ケースには時期ごとに特徴的な遺物がまとめられており、時代変遷を効率よく追うことができる。しかし、現状では各遺物のキャプションがそろっていないため、遺物によっては時期が認識できても出土場所や所有者 (王の名前) などが見学者に知らされていないものも多い。2階はキリスト教期からイスラム期の展示である。また、フレスコ画が中心であるため、全体的に照明をおとしてある。

② 課題

先にも述べたように先史時代からイスラム期までの特徴的な遺物が展示ケースごとにまとめられているが、各遺物の説明が乏しく、その充実が今後の課題といえる。

この一例として、ブヘン神殿から出土した玄武岩製のセブケムヘブ像がある (図3、展示ケース④)。遺跡名と材質やヒエログリフの釈文などの説明にとどまり、出土地点やブヘン神殿と世界遺産とのかかわりについては説明されていない。現状では、一般入館者が屋外展示と各遺物との

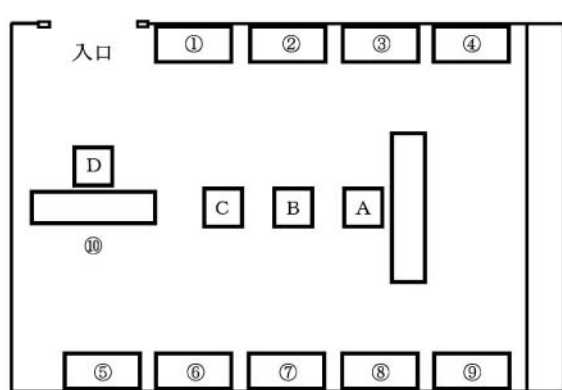


図3 屋内展示室（1F）模式図

- ①先史時代 Prehistoric
- ②Aグループ文化とCグループ文化 A & C group (3800-1500 B. C.)
- ③ケルマ文化 Kerma culture (2400-1500 B. C.)
- ④エジプト支配期 Egyptian period
(中王国 2040-1640 B. C.、新王国 1550-1070 B. C.)
- ⑤・⑥ナパタ期 Napatan period (657-300 B. C.)
- ⑦～⑨メロエ期 Meroitic period (300 B. C.-A. D. 350)
- ⑩ポストメロエ期 Post Meroitic (A. D. 350-550)
- A アトラネルサ Atlanersa 像 (653-643 B. C.)
- B タンタマニ Tanutamani 像 (664-656 B. C.)
- C アマニマリル Amanimalil 女王像
- D タハルカ王像 (690-664 B. C.)

註 時期と年代は博物館内の展示に準拠

関連性を十分に認識できない可能性が高い。

また、ブヘン神殿以外の移築建物から出土した遺物は収蔵庫で保管されており、一般には公開されていない。ブヘン神殿出土遺物もその一部が展示されるにとどまっており、ヌビア遺跡群から出土した遺物の活用には多くの課題を残しているといえる。

4. 活用の現状

移築建物は、小、中、高校生の歴史教育に積極的に利用されている（写真1）。調査期間中、2～3名の教員が引率し30名程度の児童と生徒が見学に来るというケースが多く見受けられた。女子と男子のグループにわかれており、教員は英語や物理など、歴史以外を専門とする教員も引率していた。木陰に集まり引率者の話を聞いたのち、各移築建物内の見学を行う姿などが見受けられ、建物内では博物館所属のセキュリティとよばれる監視員の⁸⁾管理と解説のもと見学を行っていた。成人の入館者は、児童や生徒に比べて圧倒的に少ないが、友人または恋人どうしで訪れる人々が散見され、博物館の存在が身近なものであることが伺える。外国人観光客はきわめて少なく、この点はエジプト側の移築建物とは対照的である（関廣 2009: 76）。

5. スーダン全土における文化財保護の現状と課題

(1) 保護体制の現状と課題

スーダンでは、1901年に古物局（Sudan Antiquities Service）が設立され、文化財保護法が1905年に制定された。その後文化財保護法は1952年と1999年に改定され、現在に至る。現在、古物局はNational Corporation for Antiquities and Museums、通称NCAM（ナカム）と名称をかえ、発掘調査部門（Field work department）、博物館部門（Museum department）、修復部門（Restoration department）の3部門で構成されている。修復部門はさらに織物、金属、土器、化学の各専門にわかれており。2009年1月現在で発掘調査部門は23名、博物館部門15



写真1 ブヘン神殿内での歴史教育

名、修復部門は8名の専門スタッフで構成されている。しかし、これまでの内戦や紛争により専門家の養成が遅れているという根本的な問題もあるが、アフリカ最大の国土をもつスーダンの文化財に十分に対応するにはスタッフが少ないと言わざるを得ない。

このような現状に加え、国内の急速なインフラ整備による発掘件数の急増が窮状に拍車をかける。また、ダルフール紛争やそれに絡んで大統領の訴追など様々な政治的問題をかかえ、情勢が不安定な国の一つに挙げられていることもあり、国内外において、遺跡の保護や活用という側面まで関心が及びにくい状況にある。

(2) 新たな課題 - カジュバル水没危機遺跡群

前項では、急速なインフラ整備に伴う緊急調査の増加について述べたが、スーダンの文化財保護の新たな課題として、ダム建設に伴う水没危機遺跡への対応があげられる。ナイル川第4急湍に建設されたメロウィダムによって周辺の遺跡が水没したことは記憶に新しいが、このときも小規模な国際救済キャンペーンが行われた（<http://www.merowedam.gov.sd/en/archaeological.html>: 2009年10月

接続可)。

2009 年現在、スーダン国内ではさらに 8 基のダム建設計画が持ち上がっている。そのうちの 하나가 ナイル川第 3 急湍付近に建設予定のカジュバルダムである。同ダムの基本計画は 1995 年に始まり資金的理由により 1999 年に一度中断した。

その後、2005 年に再度建設計画が本格化している。現地住民の反発が強く、2007 年にはダム建設への反対運動が起き、逮捕者が出た（現在は解放）。また 2009 年にも 4 月同様に反対運動が起きている。ダムが建設される予定のカジュバル一帯、およびダム関連施設や移住を余儀なくされる人々のための新居住地や耕作地の造成によって、先史時代からイスラム期の遺跡が水没または破壊の危機にさらされている。

水没の危機にあるカジュバル地域は、ハルツーム大学 A. オスマン (Osman) 教授と当時ケンブリッジ大学、現レスター大学講師の D. N. エドワーズ (Edwards) 氏が 1990 年以来、「マハスプロジェクト」を行った場所でもある (図 4)。

同プロジェクトで、1990 年 3～4 月に Aschau～Kajbar の新石器時代からイスラム期までの 87 遺跡、1991 年 11 月～12 月に Tombos～Kedurma の先史時代からイスラム期までの 120 遺跡、2000 年 4 月に Arduan 地域で 320

遺跡、2002 年 1～3 月には Simit、Musul、Nab 地域で 45 遺跡、1990 年の調査区である Hannek 地域からも新たに 50 遺跡を確認した。調査報告では、各遺跡の地点、現状、概要、種類がおさえられている (Edwards and Osman 1992, 1994; Osman and Edwards 2000, 2002)。

多数の遺跡をかかえるカジュバルダム建設予定地は、メロエ遺跡などとともにこれから世界遺産登録を目指そうとする場所でもある。それにナイル川第 1、2、4 急湍周辺の遺跡がダム建設により水没したことも考慮すると、それをまぬがれた貴重な遺跡でもある。ついに第 3 急湍一帯の遺跡も水没の危機にあるという事態に NCAM 関係者のみならず大学関係者も頭を抱えている。

先にも述べたが、NCAM の現体制で緊急調査や遺跡の保護を行うことだけでも手一杯な中で、カジュバルダム水没危機遺跡の調査・救済はもはやスーダン国内だけで解決できる問題ではないことは明白である。ダム水没危機遺跡の調査や記録保存、建造物の移築およびその保存修復、出土遺物の保存修復といった側面で海外にも支援を求めている必要があり、その対象国には日本も含まれている。

7. スーダンにおけるヌビア遺跡群の意義

さて、これまでエジプトのヌビア遺跡群の概要とスーダンのヌビア遺跡群の概要および文化財保護の現状について述べてきた。

本稿はエジプトとスーダンのどちらがヌビア遺跡群を適切に移築し、保存したかを議論することを目的とはしていないが、スーダン側のヌビア遺跡群が①遺跡の原位置から遠く離れた首都に建造物が移された点、②エジプトのヌビア遺跡群が世界遺産に登録済であるのに対し、未登録である点に言及する必要がある。

①についてはキャンペーン当時「現地保存か」、「ハルツーム博物館への移築か」という議論の対象となった。前者の場合、何の保護もなく構造物を放置することになり、移築後も風化が進むことが予測された。後者の場合は、遺跡の原位置一帯の気候よりもハルツームのほうが湿潤であるという点が問題となり、石材や壁画を保護するための何らかの工夫が必要であった。最終的には移築後の保存環境を重視するということで、ハルツーム博物館への移築が選ばれた。遺跡を取り巻く景観を重視したエジプト側の移築とは異なり、遠方に移築してしまったことで、それが非常に部分的なものになってしまったという点はスーダン側の移築の問題点かもしれない。

そして、それは②の世界遺産条約制定の端緒となった遺跡群でありながら、現状で世界遺産に未登録であるということと無関係ではない。この点は NCAM も認識している点である。

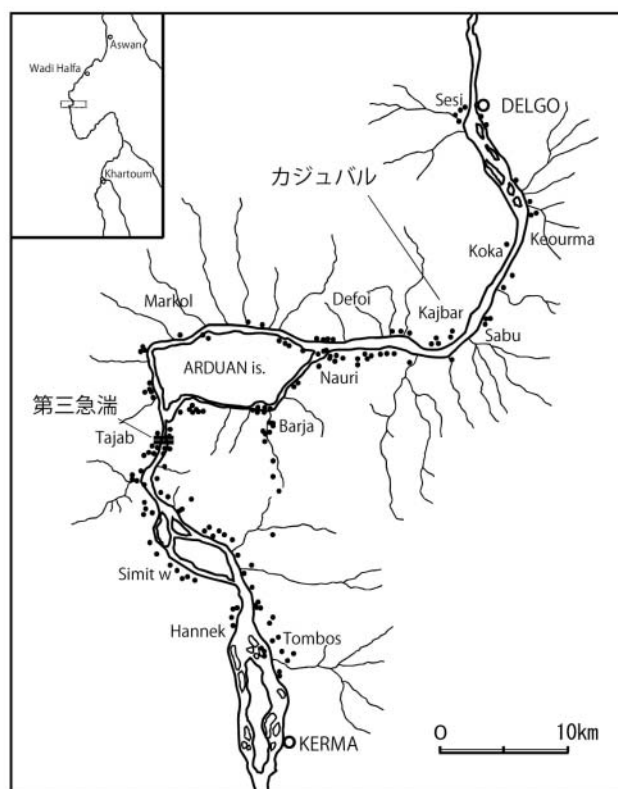


図 4 マハスプロジェクト実施地区
(カジュバル水没危機遺跡群)

一方で辺境の地にあって容易に見ることができない神殿等を一般市民が間近にみることができるようになったとも考えており、決して御座なりにされていない点を強調しておきたい。これは「4. 活用の現状」で述べた児童や生徒の課外授業に活用されている点でも裏付けられる。また、とくにエジプトの3つの保存地区に移築されたヌビア遺跡群と比較したときに浮き彫りとなるスーダン側のヌビア遺跡群の特徴とも言えるだろう。

「3. ハルツーム博物館の展示について」では、屋外展示と室内展示にわけ、それぞれの現状とその課題について言及した。先にも述べたように、神殿等が身近に見ることができるという点がスーダン側の特徴であるとするなら、室内展示にもその特徴が生かすべきではないかというのが本調査で得られた結果である。また、屋外展示⑥についても各部材が発見された遺跡名等を明示することにより、さらに充実した屋外展示になるのではないかと考えられる。

「5. スーダン全土における文化財保護の現状と課題」では、NCAMの現状と抱える課題について言及し、近年新たに生じた課題であるカジュバルダム水没危機遺跡群についても言及した。ダム水没危機遺跡だけでなくスーダンの文化財保護事情は決して穏やかなものではない。NCAMでは、ハルツーム博物館にあるヌビア遺跡群が、世界遺産に登録できないという認識を持ちながらも「他の考古遺跡を順次、世界遺産に登録していくのは義務である」ととらえており、文化財保護に対する意識の高さがうかがえる。カジュバルダム水没危機遺跡については海外からの支援を強く求めており、またそのなかでの恒久的で学術的な交流を望んでいる。

ヌビア遺跡群はこの新しい課題に対し、文化財保護の金字塔としての役割を果たしており、それは学校教育や生涯教育への活用とは違った側面からの活用となるだろう。本研究でとりあげたヌビア遺跡群は、「2. 調査の経緯と目的」でも述べたように政治的背景を乗り越え、保有国と協力国が一丸となって調査保存活動を行った好例であった。それをもとに世界遺産という概念が作られ、今に至る。今一度、スーダンの文化財を世界遺産という観点から振り返ると、A世界遺産条約制定の端緒となった遺跡、B世界遺産登録遺跡、C世界遺産未登録遺跡の3つに分けることができる。Aはとりもなおさずハルツーム博物館に移築されたヌビア遺跡群であり、Bはゲベルバルカルとナバタの遺跡群、Cはカジュバルダム水没危機遺跡を含む多くの遺跡群である。Aの存在は「部分的な移築」というマイナス要素をもちつつもBを生み出すきっかけとなり、Cの保存活用への原動力となっていることは確かである。そして、3種類の文化財が存在するという点が、スーダンの文化財の最大の特徴といえるだろう。

8. おわりに

世界遺産に登録されれば遺跡は本当に守られるのかという疑問から、世界遺産とはどのように成立し、本来どのように活用されるべきなのかをもう一度振り返るためにヌビア遺跡群、とくにスーダン側のヌビア遺跡群に着目してきた。

世界遺産条約制定の端緒となりながら未登録のままスーダン文化財保護の金字塔として生きる現状は、今後の世界遺産のあり方やさらには文化財保護そのもののあり方に対しても非常に示唆に富んだ存在である。必ずしも世界遺産となり世界的に著名になることだけが保存活用の道ではなく、研究者のみならず遺跡の身近に住む人々によって、学校教育や生涯教育の中で常に身近に感じられる存在であることも大切であることを物語るようにも受け取れる。

本報告では、スーダンのヌビア遺跡群や文化財保護の現状と課題を報告することを目的とした。これを踏まえたエジプトにおけるヌビア遺跡群との詳細な比較や世界遺産のあり方とのかかわりについては別稿を用意したい。

謝辞

本調査の遂行と本稿の作成にあたって、次の機関と個人からの助力を得た。記して感謝したい。NCAM・ハルツーム大学考古学研究室・在スーダン日本大使館・奈良文化財研究所・辻村純代・佐々木憲一・松本康隆（順不同）。

註

- 1) ケルタッシのキオスクはローマ期の建造物で、ペイト・エル・ワリ神殿とゲルフ・フセイン神殿はラムセス2世(1279-1212 B.C.頃)によって創建され、カラブシャ神殿はトトメス3世(1479-1425 B.C.頃)とアメンホテプ2世(1428-1397 B.C.頃)により創建された神殿である。
- 2) ダッカ神殿は紀元前220年ごろからメロエ王アルカマニが本格的な造営をはじめ、マハラッカ神殿はローマ期、セプア神殿はラムセス2世によって創建された神殿である。
- 3) アマダ神殿はトトメス3世、デール神殿はラムセス2世によって創建された神殿である。
- 4) 紀元前680年にタハルカ王(690-664 B.C.頃)によって神殿が造られ、プトレマイオス期以降に要塞として機能した遺跡である。
- 5) ゲベル・シェイク・スレイマンの部材も説明はなく、予備知識がなければそれと知ることはできない。
- 6) ヒンケルは、単に各建造物を解体し博物館に移築しただけではない。建造物の増改築にともなうプランの変化や、部材の再利用にも注目し、造営前の鎮壇遺構等の検出も行うなど多角的な調査を行った(Caminos 1998b: 101-111)。
- 7) シェラックとは、ラックカイガラムシなどが分泌する虫体被覆物を精製して得られる樹脂状の透明無味無臭の物質。
- 8) 学芸員(キュレーター)とは異なる。

参考文献

- Caminos, R. A. 1974 *The New Kingdom Temples of Buhen*. 2 vols. London, Egyptian Exploration Society.
Caminos, R. A. 1998a *Semna and Kumma. I. The Temple of Semna*.

- London, Egyptian Exploration Society.
- Caminos, R. A. 1998b *Semna and Kumma. II. The Temple of Kumma*. London, Egyptian Exploration Society.
- Dunham, D. and J. M. A. Janssen 1960 *Second Cataract Forts. Volume I. Semna-Kumma*. Boston, Museum of Fine Arts.
- Edwards, D. N. and Ali Osman 1992 *The Mahas Survey 1991*. Interim Report and Site Inventory. Mahas Survey Reports No.1.
- Edwards, D. N. and Ali Osman 1994 *The Mahas Survey 1990*. Interim Report and Site Inventory. Mahas Survey Reports No.2.
- Edwards, D. N. 2004 *The Nubian Past: an Archaeology of the Sudan*. London, Routledge.
- Osman, A. and D. N. Edwards 2000 *The Mahas Archaeological Survey, 2000*. A Preliminary Report.
- Osman, A. and D. N. Edwards 2002 *The Mahas Archaeological Survey, 2002*. A Preliminary Report.
- Porter, B. and R. L. B. Moss 1995 *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs and Paintings. VIII. Nubia, the Deserts, and Outside Egypt*, pp.120, 127-156. Oxford, the Griffith Institute.
- Säve-Söderbergh, T. 1960 The Paintings in the tomb of Djehutyhetep at Debeira. *Kush* 8: 25-44.
- Säve-Söderbergh, T. (ed.) 1987 *Temples and Tombs of Ancient Nubia*. London, Thames and Hudson.
- Trigger, B. 1976 *Nubia under the Pharaohs*. London, Thames and Hudson.
- Welsby, D. A. 2003 *Survey above the Forth Nile Cataract*. Oxford, Archaeopress.
- Wildung, D. 1997 *Sudan. Ancient Kingdoms of the Nile*. Paris, Flammarion.
- 外務省国際連合局 1960『ユネスコの「ヌビア遺跡」救済運動の概要』外務省国際連合局。
- 河野靖 1995『文化遺産の保存と国際協力』風響社。
- 関廣尚世 2008「ヌビア遺跡群のいまー世界遺産条約制定のきっかけとなった遺跡群が語るものー」『考古学研究』55巻 2号 12-17頁。
- 関廣尚世 2009「スーダン共和国におけるヌビア遺跡群の現状と課題」『日本西アジア考古学会第14回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会 73-78頁。
- 鈴木八司 1970『ナイルに沈む歴史ーヌビア人と古代遺跡』岩波新書。
- 高橋里香 2009「世界遺産登録のあり方と今後の展望 なぜ、平泉の文化遺産は記載延期になったのか」『和光大学現代人間学部紀要』2号 145-161頁。
- 松浦晃一郎 2008『世界遺産 ユネスコ事務局長は訴える』講談社。
- 松本康隆 2007「世界遺産と国際キャンペーン」『士會』521号 1-4頁。
- (社)日本ユネスコ協会連盟編『世界遺産 年報2003』。

関廣 尚世

鳥取県埋蔵文化財センター

Naoyo SEKIHIRO

Archaeological Research Center of Tottori Prefecture